

2022. 12. 10 退任あいさつ

本日は、依然としてコロナリスクが去らない中、このように多数の会員の皆さまにお集まりいただき誠にありがとうございます。

また、先ほどは来賓の福原様及び横枕理事長から過分のお褒めの言葉をいただき、大変恐縮しております。

平成19年の暮れに理事長職をお引き受けしてから数えると、足掛け15年にわたる理事長生活を何とか乗り越え、今日の日を迎えられたことはひとえに会員の皆さまのご理解とご協力の賜物と、心より感謝申し上げます。

当クラブも34年の歴史を経て、創立時71名だった会員が現在では150名を終える人数となっています。当時の会員のうち、現在残っているのはわずか15名となってしまいました。クラブ員の9割がクラブ発足以降に入ってきた人です。

こうした環境の中で、私は、当クラブの創設時から在籍した人間として、クラブの歴史を皆さんにお伝えする義務があると思い、この場をお借りして今までお話ししてこなかった話も交えて、少しお話しさせていただきたいと思います。

福原家は当初契約をさせて頂いた福原新一さんから数えて3代目である高洋さんが現在のご本家の当主であることはご承知のとおりです。福原家本家のご当主は代々当クラブへ無償で土地を提供したいきさつやどのような思いでクラブに先祖伝来の大切な所有地を無償で貸しているかという思いを受け継いで来ています。

私は、これまでのクラブと福原家とのかかわりあいの歴史を会員の皆さんが知ることによって福原家との信頼関係がより強固なものになることと確信しています。

では、まず当クラブ誕生の経緯についてお話しします。

当クラブのそもそもルーツは湘南グリーンテニスクラブにあるといっても過言ではありません。

現在量販店であるオリンピックがある場所に今から47、8年前に全天候型のサーフェス9面（10面だったかもしれない）有した湘南グリーンテニスクラブが誕生しました。入会金は確か80万とか90万とかかなり高額だったと記憶しています。このクラブは天岳院が経営していたのですが、開設して10年くらいたったある日突然経営難を理由に一方的に会員に対して閉鎖を通告してきました。そしてクラブを立ち入り禁止にしたうえで、一方的にコートの上に仮囲いを設置して解体作業を開始したのです。当時、コートを一望に見渡せるところに住んでいた田島さんのお住まいがあったのですが、それを見ていた奥さん（光子さん）がすわ一大事とばかりに、工事現場に駆け付け重機の前に仁王立ちになって工事を中止させたという事件が発生しました。（後に村岡のジャンジュダルク事件と呼ばれたとかよばれなかったとか）この事件を契機に、一方的な対応に怒った会員の有志2百数十人が、「湘

南グリーン TC を存続させる会」を結成し工事の差し止めを求めて横浜地裁に工事禁止の仮処分を申請しました。蛇足ながら、これには私は全く関与していませんので、ご心配無用です。何回か和解期日を経たのち、和解が成立し、会員全員に和解金として20万だったか30万だったかを返還するという事で決着を見ました。

その後、飯尾さんを中心としたテニス難民の有志が、当時会員であった福原家の二女典子さんを通じてお父さんの新一さんにテニスクラブ建設のための土地の提供をお願いしたところ、快く承諾して頂き、話し合いの結果、現在のクラブの場所に土地をお借りすることになりました。福原家としては、湘南グリーンの場合もあり、また、貸してもらいたいという人たちがいわば武闘派だったこともあり、退去時のごたごたを絶対避けたいということで、契約期間は5年とし、期間終了後は直ちに原状に復してお返しするという条件で無償でお借りすることができました。

こうして、土地が確保されたのち、工事費用や保証金の借り入れのため、発起人の方たちが自己の財産を担保に銀行から総額約5000万円の借り入れを行いました。そこで借入金の返済のためには新規に最低100名の会員を1人入会金50万円で募集することにしました。飯尾さんの話によると、立ち上げ当時に40人くらいしか集まらず、会員の知人を頼ったり、最後には1000枚のチラシを作成して手分けしてポスティングしたそうです。その結果、チラシを見て入会した人はたった1人だけという有様で、人集めには随分苦労したそうです。

以上の経緯を経て、平成元年8月30日現在で71名の正会員8名のジュニア会員によって当クラブが発足しました。

余談ですが、クラブを作る話が持ち上がった当初、クラブの名前を「湘南グリーンテニスガーデン」とする案が有力だったようです。

こうして創立から5年が経過し、契約書の上では契約が終了することとなるころですが、会員の存続の希望が強く、その旨を新一さんお伝えしたところ、会員の希望をご理解いただき、以後単年度で契約を更新することになりました。

その後平成8年まで中野理事長の時代が続き、その後大森さんが理事長に就任しました。

ちなみに、FRC というのは大森理事長になってから理事長発案のもとにできたクラブの運営指針でありクラブ員の行動規範でもあります。

平成16年にはクラブ創設15周年記念を市民会館小ホールを貸し切って実施し、参加者全員がかくし芸を披露するなど大いに盛り上がったものです。

この様にクラブの運営が順風満帆で推移していた矢先、平成19年6月8日かねてより健康を害されていた福原新一さんが逝去されました。この日をもって契約終了となりました。

契約上は直ちに立ち退き義務が生じ、これを怠ると1日につき3万4000円の使用相当損害金の支払い義務が生じるようになっていました。ところが、新一さんの相続人であった博さんは、なんと翌年の9月30日まで使用貸借期間を延長して下さったばかりでなく使用相当損害金の請求もしないという常識的には考えられないような対応をしてくださり、会員一同安堵に胸をなでおろしました。

その後、博さんはクラブの存続の意向をクラブ側に示されクラブの存続が決定しました。会員はこの一報を聞き歓喜に沸きました。

福原家側の代が変わったことから大森理事長はクラブ側の理事長の若返りが必要と判断され、クラブ員に推薦人6人以上を得た上で自薦他薦を問わず理事長まで届けるよう指示を出しました。平成19年度中に次期理事長を選任する方向で手続きが進められました。

推薦手続きが始まってしばらくして、私は、鈴木和子さんから世代交代を理由に強く理事長就任の要請を受けた。しかしながら、理事の経験もない自分が理事長になるなど想像もつかないので、当初はお断りしていました。しかし、その後他の諸先輩方からも推薦をいただき退路を断たれる形で理事長をお受けすることになりました。鈴木さんから「私が全面的にバックアップするから思うとおりにやりなさい」と言われ万事休すと思い理事長をお受けする決心をしたという記憶があります。

こうして翌年の平成20年3月に福原家のご当主である博さんと面談する運びとなりました。面談の際に博さんから、「理事長を引き受けてくれる人がなかなか現れないので心配していましたが、この度は良く引き受けてくれました。理事長になっても特に名誉が与えられるものでもないし、ましてやお金になるものでもなく苦労ばかりで大変な役回りですが、この世の中にはまだ奇特な方がいらっしゃるんですね。」と言われたことを昨日のこのように思い起こされます。

この時は、やっぱりそうだよなああと後悔したものでしたが、一方、会員の多くの人からご指名を受けた以上、やらざるを得ないなと決意も新たにしました。

さて、お受けしたもののどのようにクラブ運営をしたらよいのか皆目見当がつきません。そこで、会員の皆さんに対して今後どのようなクラブになってほしいかというアンケートを実施することにしました。この時に得られたアンケートの結果が、今日のクラブ運営の基礎となっています。

ところで、平成20年に引き継いだ当時、新一さんが亡くなったのを契機に多くの会員が退会され、会員数は100人を割り込む状況になっていました。当クラブの収支としては、会員100人で収支トントンというところで100人を割りこむと赤字となります。

そこで、会員数を増やすことがクラブとして喫緊の課題となりました。会員募集の広告を出す場所を物色したりしたのもこのころです。

平成20年の9月に博さんと向こう1年間の使用貸借契約を締結しました。この頃は、契約書の作成を福原家の顧問弁護士事務所が行っていたので、契約更新の際に毎年契約書作成料として30万円をクラブが負担していました。

契約の際に博さんが、ポツリと「最近、クラブでテニスをしている人が随分少なくなりましたね。以前は、平日でも結構たくさんの方がコートを利用していたのにちょっと寂しいですね。」とおっしゃいました。

私はこの時、土地を貸す側の論理と借りる側の論理は全然違うことに気づきました。貸す側は貸した以上少しでも有効利用してもらいたいと思うのに対して、コートとして借りている側は、何時でも自由にコートを使える環境が好ましい、つまりすいていていつでもテニスができる状態が好ましいということです。現に、クラブ員募集に関しては、会員から反対の声や、必要最小限の募集に限定すべきだという声はかなり上がってきました。

博さんと最初の契約を締結した翌年の21年には大事件が発生しました。この年の5月9日に博さんが急逝されたのです。昨年契約をさせて頂いた時のお元氣な姿を思うと全く信じられませんでした。

新緑親睦大会が目前に迫っていたため、直ちに大会中止の指示をしようとしたところ、典子さんからご親族から新緑親睦大会は予定通り実施してほしいとの連絡がありました。それが故人の意志にも沿うことになるとのことでした。そこで、急遽故人を偲びアルコールなしの追悼大会としました。契約上は既に契約終了となっているにもかかわらず、福原家の温かいご配慮に会員一同感動したことを鮮明に記憶しています。

その後、私は、法律上不法占拠状態になっているところから、直ちに退去手続きに移るべく典子さんに今後の予定についてご相談しました。すると、典子さんから「契約は契約だから」ちょっと待ってくれとの回答がありました。一応法律家の端くれの人間としては、契約がすべてと思っていたので、その意図するところが分かりませんでした。このことは、後になって、その趣旨が分かりました。契約上は確かに契約関係終了となるが、これまでの信頼関係を考えると何かほかに良い解決策があるかもしれないからお互いに知恵を出し合おうという趣旨だったのです。

福原家とは何という寛大な心の持ち主なのでしょう。こうして、福原家の好意に甘えて、相続人総代である福原和子さん（高洋さんのお母様）と現行の契約内容を相続人が確定するまでの間、継続させていただく合意書を取り交わさせていただきました。

そして、平成21年9月に当クラブの敷地の相続人となられた高洋さんと第1回目の契約を行いました。実はこの時から契約書をクラブ側で作成させていただき顧問弁護士事務所の関与をスルーさせていただくことで高洋さんの御了解をいただきました。これで毎年経費として掛かっていた30万円が浮くことになり、これはクラブ員を新たに3人入会させたのと同じ経済的効果があります。当時のクラブとしては誠にありがたいことでした。

さらに、懸案であった契約終了の翌日に退去義務が発生するという契約条項の見直しをお願いしたところ、これも当クラブ側の要望どおり、90日の明渡猶予期間を設けて頂けることになりました。

この様に、高洋さんの代になって契約内容がクラブ側の事情を考慮した内容に改正されことは、特筆すべき事柄です。

平成21年という年はテニスクラブにとって大きなターニングポイントとなりました。この年を境に、民間のテニスクラブが次々と閉鎖へ追い込まれていきました。鎌倉シーサイドを皮切りに、太平台、鶴沼グリーン、リバーサイドなどの民間クラブが次々と閉鎖されました。この時期はテニス難民が大量に発生した時期でした。当クラブとしても、もともとテニス難民で結成したクラブなので、少しでも多くの方を救済しようということになり、入会基準を大幅に緩和して多くの会員を受け入れることにしました。クラブ員数が一気に150名近くに増加し、既存の会員さんからクレームが出たこともあります。クラブの活性化という点で福原家のご要望にも沿うことなのでご理解いただくこととしました。

さて、私の理事長時代の思い出となる出来事としては、4つあります。その一つは、入会金を廃止し、月会費のみとしたことによって、入りやすく辞めやすいクラブにしたことです。先ほどのテニス難民の受け入れもその延長線上にあります。2つ目は経年劣化したコートの全面張替えを行ったこと。3つ目はクラブハウスの建て替えをおこなったことです。

平成23年(2011年)3月に東日本大震災が発生したわけですが、幸いにもクラブに被害はありませんでした。しかしながら、来る関東大地震に備える必要からクラブハウスに少なくとも耐震補強をする必要がありました。見積もりを取ったところ、余りにも高いのでどうしたものか思案していたところ、高洋さんの方からこの際だから建て替えてはどうかという話がありました。何と高洋さんの方で資金を提供していただけるというのです。

話し合った結果、総工費2200万円のうちの1200万円を高洋さんにご負担していただき、登記名義を高洋さんの単独名義にすることにしました。

こうして平成25年にクラブの悲願であった新しいクラブハウスが完成する運びとなりました。

実は、クラブハウス建て替えの話がまとまった段階で、私は理事長としての役割をすべてやり遂げたことから、理事長を退任しようと考え、その旨を高洋さんに申し上げました。すると高洋さんから、「安原さんが理事長を降りるようなら建て替えの話はリセットさせてもらいます。」と言われ、退任を思いとどまざるを得ないことになりました。そこで、新しい会員が増えたこともあり、クラブが落ち着くまでやらせていただきますということで、今年の9月までやってきたものです。

最後の仕事としては、原状回復義務条項を契約から除外し、クラブが負担するのは契約上明け渡し義務だけとしたことです。内容は既にご承知のとおりですが、契約内容は基本的内

容としては福原家とクラブ側の双方がウィンウィンのはずですが、福原家にとって全くノーリスクという訳ではないので、クラブ側の事情をご理解いただきこのような契約を承認していただいた高洋さんには感謝しかありません。

以上、クラブ誕生から今日までの歴史を福原家との関わりを中心に述べさせていただきました。これからの会員の皆さんの福原家への理解と敬意発揚のお欲に立てば幸いです。

最後に、14年間の理事長生活を実質的に支えてくださった福原家に対しここに万感の思いを込めて感謝の意を表し、私の退任の挨拶とさせていただきます。